結草
kusamusubi
No.29

Publishing house:2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2020.03.01

亡き人と出遇い直す

順教寺住職　細川　公英

どうも皆様おはようございます。浄光寺様のお盆のご縁を頂戴し、今ほど紹介に預かりました順教寺の細川と申します。皆さまと共に南無阿弥陀仏の教えを聴聞させていただきたい、そう願って出て参りました。よろしくお願い申し上げます。今日はお配りさせていただいたプリントに沿って少しお話をさせていただきたいと思っております。

本当の供養とは

お盆のお参りというのは、私たち日本人にとって、本当に馴染みの深い一つの仏事であろうかと思う事でございます。金沢の中心部は七月、新盆という事でございますが、七月、八月と私たちは毎年欠かさず、お盆のお参りというご縁を頂戴して、皆さん熱心に、そしてご丁寧にお参りしておいでる事でございます。だた、我々はお盆のお参りはするんでありますが、なぜお盆というお参りや法要が昔からこうやって伝わってきたのか、その辺を少し考えさせていただきたいと思っておるんであります。

皆さん、どういうお気持ちでお墓参り、お盆のお参りをなさいますか？やはりまずそこには、必ず亡き方がいらっしゃるのではないでしょうか。自分にとって親しい方が亡くなられ、先にお浄土にお帰りになられた。そしてお墓にお骨が納骨してある。だからその方のお参りをさせていただく。亡き方というのが必ずおいでるはずでございます。亡き方がおいでんがにお墓参りするってあんまりないでしょう。やっぱり、身近な自分の両親であったり、おじいちゃん、おばあちゃんであったり、その方のお参りということであります。これは大事な事で、必ず亡き方がお盆のお参りを導いて下さっておる。

また我々が亡き方を供養するという言い方がありますね。供養する。それでお盆のお参りをする。そしてお供え物もお供えします。お墓の前に亡き方が生前好きであったものをお供えする。お酒が好きやった、ビールが好きやった、あるいはコーヒー、あるいは甘い物が好きやった、果物が好きやったと言うてお供えをする。そしてお供えをするだけでなく、お坊さんに来ていただいて一緒にお経を勤める。それがご先祖様の供養かな、というわけでお参りさせていただいておるわけです。もう少しそこを突っ込んで考えていますと、じゃあ一体どういうことが本当の供養になるのか。

皆さんも当然、願いってあるでしょう？願いをお持ちでしょう？実は、亡き方にも願いがあるんだと。必ず願いがあるんだと。もっと言えば仏様には願いがあるんであると。その願いは、一体どういう願いなのか聞かせていただくのがお盆というご縁であり、本日のお参りのご縁である、そういう事を思うんであります。ちょっとこのことを頭の中に入れておいて下さいませ。死んだおじいちゃん、おばあちゃんには願いがあるんやなぁという事や。じゃあ、どんな願いが？と言われても我々ピンと来ないから、その事を解き明かしていくんであります。

お盆もそうでありますが、仏事と申しましょう？丁寧に御仏事と言うております。字をよく見ておったら、「御」は丁寧な言葉ね。「仏」

は、仏様でしょう？阿弥陀様、仏様、あるいは亡き方だといただいてもよろしいかと思うんです。諸仏ということで。そして仏事の「事」はよく見たら仕事の「事」という漢字やね。だから私はこんな風にいただいておるんです。仏様には仕事があるんやと。どうですか。あるいは亡き方にはお仕事があるんやと。今、仕事と申しましたが、その言葉を変えれば願いがあるんやと。仏様には願いがあるんやと。亡き方には願いがあるんやと。

　ではお仕事の内容やね。願いの内容は何かと言う事であります。お仕事、願いの中身、これは簡単に申しますれば、仏様の教え、南無阿弥陀仏の教えを聞いていただきたいんですと願ってらっしゃるということ。仏様、亡き方が。誰に向かっての願いか？ここ大事ですよ。誰に対する願いでしょうか？これは他でもない我が身です。ここがね、当たり前の様で一番難しい所。なかなか自分の事として聞けないのね。

　本日もお参りしています。ご本尊の前にお座りになって合掌してお念仏申しております。実は、そこには皆様お一人、お一人に仏様からの願いがかけられておるということであります。でも、そう言われてもね、ピンと来んでしょう？えーっ！仏様の願い、亡き方の願いがこの私に？どんなんや、本当かいな。残念ながら私たちの方は、そういう風になかなか仏様の、亡き方の願いを聞けないという業を抱えておるのね。不思議なもんであります。

　でもよくよくいただければ、どうぞ仏法を聴聞して下さい。しかもその事をあなた自身で聞く身になって下さい。そういう事がどうやら願われておる。仏法聴聞（ぶっぽうちょうもん）と言うてもはっきりせんから、ぐっとそれを明らかにすれば、どうぞお念仏申す生活を送って下さいという事です。お念仏というのはね、日ごろ私たちが申しております、南無阿弥陀仏。ナマンダブツ、ナマンダブツと念仏申す身にどうぞなって下さいと。ただその事一つが、どうやら願われておるようです。

　でもその理由が分からんわね。仏様、亡き方、もっと言うと健康に過ごして下さいとか、仲良く過ごして下さい、あるいは自分の思い通りの人生を生きて下さい、色々ありますよね。そういう事を願ってらっしゃるのかと思ったら、どうやらそういう事と全然違って、念仏申してくださいという事を願ってらっしゃるようである。我々はピンと来ないよね。社会に役立つ様な人間になりなさいと言われたら、すぐ分かるの。そうや、頑張らんなん。頑張りなさい、努力しなさい、他人に優しくしなさいと言うて下さるのならすぐ分かるのね。でも何で念仏しなさいなんか？そこは我々の疑問です。この疑問をぜひお持ち下さいませ。これ、すぐ分かりません。私もまだ何故なのかこれ分かりません。なんで念仏申せ言うたかを聞かせていただくのが我々の聞法のご縁であります。すぐ分からんのです。それを一生聞法、仏法を聴聞、聞かせていただくという事が、どうやらそこにあるのかな。

目連尊者

　プリントにも書かせていただきましたが、お盆の由来といいましょうか、色々説があるようなんですが、『盂蘭盆経（うらぼんぎょう）』というお経典さんがあるようであります。ちょうど今もすごい雨が降っていますけど、インドは雨季と乾季が分かれている。雨季になるとずっと雨が降り続く。その降り方も半端ない訳であります。乾季の時、お坊さん達は、遊行（ゆぎょう）と申しまして一定の所に定住しておるんではなくて、各地を転々と歩いて、そこでお説法していくんであります。色んな方に法を聞いてもらう為に、伝導の為に。でも雨季の時は、雨が降っておりますから、転々と歩くことが叶わんと。そういう事で一箇所に集まって、雨季の時はそこで仏法を聴聞させていただく。それを安居（あんご）と申しております。九十日間あるようであります。

　その安居の最中、お釈迦様の十大弟子のお一人で神通第一と言われていた目連尊者（もくれんそんじゃ）が、神通力をもって、亡くなった自分のお母さんが、今どうしているのか探ったそうであります。その姿を見ると、なんとお母さんが、餓鬼道（がきどう）に落ちている。そのお母さんは、喉（のど）を枯らし、そして餓（うえ）え

ておる。餓鬼の世界というのは常に喉がカラカラなんです。そして、食事も食べるんだけど、いつも空腹なんです。満たされないという世界であります。そういうような状況のお母さんを見たら辛くなりますから、水や食べ物を差し出した訳であります。お供えとしてね。そうしたところ、口に入る直前にことごとく炎となってお母さんの口には入らんかったというのです。何とかしたいと差し上げるんだけど、お母さんの口に届かない。それでお師匠さんのお釈迦様にお尋ねするんであります。

そうするとお釈迦様は、安居の最終日、今のお盆の七月十五日、その日にすべてのお坊さん方に食べ物を施しなさいと。すべての方々に施せば、お母さんにもその施しの一端が口に入るからと、お釈迦様がそうお答えになった。実際その通りに目連尊者は、安居の最終日に全ての方に施された。そうしたところ、そのお供え物がお母さんの所にもちゃんと届いてお母さんが救われたと、そういう教えがお経に書いてあるようであります。

大事なことは何かということであります。お亡くなりになったんやけど、餓鬼の世界で苦しんでらっしゃるということなんであります。我々の事に置き換えてみても、亡くなった私の大事な方は、今頃どうなっているのか？不安になったり、色々思いを巡らしてしまうのでありますが、何故お釈迦様が最終日にお供え物を施しなさいと言ったのか。私なりにいただくと、お母様が願っていらっしゃる事は、単にお供え物をお供えする、それだけではなくて、お母様は、どうぞ仏法を聴聞して下さいということを願っていらっしゃるんやと。安居の最終日までどうぞみんなと共に仏法を聴聞して下さいと。お釈迦様が、最終日にお供え物をしなさいと言った事は、最終日までどうぞ仏法を聴聞して下さいということで、それが亡き方、お母様の願いでもあります。私はそのようにいただいておるんであります。ただ単にお供え物をお供えしてお母様が救われたのではなくて、この我が身が仏法を聴聞していくというその事実が大切なんであります。

実は目連尊者という方は、凄い方だから、いつもお釈迦様の説法を聞いてらっしゃって、頭も凄くいいんでしょう。でも、その目連尊者が本当に仏法を聞いておったか、非常に難しい所です。いつもお釈迦様のおそばにおるから、仏法をいただいておるかというと、これどうやら別もんやわ。我が身の事として本当に南無阿弥陀仏の教えを聞いておるかどうか、これ非常に難しい事でございます。仏法を知識で聞いたりね。自分の自慢の為に聴いたり、そういう聴き方もひょっとしたらあるかもしれん。本当に我が身を生きる為に仏法をいただくという聞き方をしていたかという事が、実は目連さんが問われておったことやな。私、そのようなことを思うんであります。

教え子の死

プリントの方にも書かせていただきましたが、私は大学を卒業してから金沢戻ってきましてね、三十年ほど高校の方にご縁をいただいておりました。その中で、色んな生徒さんと出会わせていただきました。その中で色んな出会いがあるんだけど、やはり辛い出会いというか、辛い別れというものも経験してきました。実は今年の六月にですね、たまたま朝刊を目を通しておりますと、お悔やみ欄に、見た事ある名前を見つけました。まさかと思ったけれども、住所も一緒やし、あらーと思った。実は、教え子でありました。まだ四十代の。彼とのご縁というのは、高校一年生の時と三年生の時の授業で一緒になってね。彼は野球部でした。うちの高校は、野球部の人数が多いから、なかなかベンチ入りも難

しい。今から何十年か前、彼が高校生三年の最後の夏に、県予選の決勝に勝ち上がって、甲子園の出場が決まったんであります。私たちもアルプス席に応援に行きました。彼はベンチには入りましたけど、残念ながらレギュラーではなかった。でも九回二アウト、そこで監督さんが代打を告げまして、最後のバッターとして彼が出てきたんであります。高校生活、最初で最後の甲子園の打席でありました。残念ながらアウトになりましたが、最後アウトと分かっていても、一塁ベースにヘッドスライディングするのが高校野球の素晴らしいところです。プロ野球には、ああいう姿はありません。そして、勝った方も、負けた方も、最後涙を流す。勝った者は、勝った者で涙を流し、負けた者は、負けたもので涙を流す。あの姿が多分、感動を呼ぶんだろうと思うのです。彼も最後アウトを分かっていて、頭からヘッドスライディングして、試合終了ということでありました。結果は残念でありましたけど、帰って来てから「良かったな。先生、いい思い出になったよ」と喜んでおった姿を思い出す事でございます。

大学を卒業して彼は魚屋さんになりました。お父さんの後を継いで、魚屋を一生懸命しておりました。いきなり私の携帯に電話かかってきた。何かっていうと、「先生、お寺やったね。先生のお寺に今度お参りに行っていいか」という電話でありました。急なことだったので、びっくりして「どうしたんや」と。「一回お参りに行きたいんです」と。「自分はお魚を生業にしとる。魚の命を毎日いただいておる。その供養の意味を込めて、一年に一回お参りをしたいんや」という話でありました。そうか、そういう事かということで、必ずカニの解禁の直前になると、私どものお寺に、お店の若い方を連れて、一緒にお参りをしておった。そういうご縁が、ずっと続いておったことでございました。

その彼が、心臓を患っておったというのは後で聞きましたが、本当に突然の事でありました。お葬式とお通夜に皆さんと一緒に参列させていただきました。彼の遺影を見ると、自然と涙がぼろぼろ出てきました。野球部の帽子とグローブが棺の上に置いてあって、たくさんの仲間がお参りに来とった訳であります。そういう事が、六月にありました。

教え子が先にお浄土にお帰りになるというのは、私にとっても辛いことでありましたが、私はそこから一つ問いをいただいたんであります。彼にお参りも来ていただいたけど、彼とは仏法の話はお互いしとらんがであります。でも彼の人生全体は、この私、細川に一体何を願って下さっておったのだろうか。そういう事は、生前彼は直接、私に言いません。直接は言わないけれど、今、亡くなってみて初めて、彼の人生全体の彼の願いというのは、一体何だろうかと。そのことが私にとって、問題と課題になってきたんです。そういう事って実は大事なことなんですね。大事なことだけど、普段我々は、その事がふーっと忘れてしまうんであります。不思議なもんやね。もう終わったらすぐ過去の事として流れていくんであります。どんどん、どんどん。毎日、目の前のことに追われるでしょう。いつの間にか忘れてしまうんです。でも今日はこのお盆のご縁をいただいて、改めて私も彼の人生全体は、一体私に何を願っておいでだったのであろうかと振り返る。私のこれからの人生を通して、一生かけてその事を問うていく。南無阿弥陀仏の仏法に照らし出していただいて、その事を訪ねて行くんであります。そういう責任が私にはあるんだなと思う事でございます。

平野恵子さん

それともう一つ、プリントで言うと③番。これ、大分前のお書物でありますけどね、平野恵子（ひらのけいこ）さんという方がお書きになったタイトルが『こどもたちよ、ありがとう』というご本であります。平成二年の出版であります。平野恵子さんというのはお寺の坊守（ぼうもり）さんなんであります。そして、ご自身がお若い時に癌（がん）を患われる。そして宣告される訳であります。もう、余命がいくばくもない、という事をお医者様から知らされる訳であります。

もう一方で、生まれ持って重度の脳性小児麻痺を患って生まれたお子様が一人おいでる訳であります。それは平野さんにとったら、辛いと申しますか、突然と言いますか、我々第三者が思いを慮るというのはなかなか難しい事であります。ご自分の身ももうあまりない。そして、子供さんの事を想うと、どうなるのか。本当に辛い日々を送られた訳であります。葛藤の日々ですね、不安と、そしてこれから先、我が子がどうなるんだろうかと。そういう親としての想いですね。実は、そういう中から南無阿弥陀仏の仏法に出遇い直されていくんであります。

よく考えたら、この方はお寺様でありますから、生まれた時から南無阿弥陀仏の仏法の中に育ってらっしゃる訳であります。でもこれね、先ほどの目連さんと一緒でね、お寺の中で生まれた者が、最初から南無阿弥陀仏の仏法に目覚めておるかというと、それは別物であります。皆様方、お寺さんはちゃんともう仏法の事ならわかっておいでるんやろうなと、もしご覧になるんやったら、それは違うんであります。私もこういう衣を着て、偉そうに皆さんの前に出て話しておりますが、前に出て話す資格は無いんであります。やはり聞かせていただくんですね、僧侶とか関係なく。仏法を聞かせていただく身になるという事が大事なんであります。ちょっと衣着ると、聞かせてあげんなんてそういう根性がふーっと出てくるんであります。そういう根性を先程の目連尊者は、ぴたっとお釈迦様から言われたんでしょう。お前はちゃんと仏法を聞いておるのかと。そこに立たなダメやぞと。聞いてるようでこれが自分の自慢にすぐ変質したり。自分がこんだけ頑張っとるというのにすぐ変わるんだったら、仏法を聞いた事にならんのやという事であります。そこが難しいんです。

出遇い直す

出遇い直すという事があるんだよね。だからこの平野さんは、出遇い直されたんです。自分がこういう癌の身になって、そして子供さんにこうやって教えられて初めて南無阿弥陀仏の念仏にもう一回出遇い直されて行かれたんです。私たちには、もう一回出遇い直すという事があるんやと思う。亡き方ともう一度出遇い直すという事があるんだよ。歳重ねてようやく、あの時の亡き方の想いというのが、今この歳になってようやく分かるという事があるんでしょう。これが十年かかるか、二十年かかるか、三十年かかるか、それは分からんのです。早い人はすぐ気づくかもしれんし、それはご縁であります。でも少なくとも私たちの人生に、出遇い直すという事があるんだということです。もう一回、亡くなったおやじと出遇い直させていただく。亡くなった母親と出遇い直させていただく。そういうご縁をいただけるのであります。

ここで平野さんがどういう状況で出遇い直されていったのか、ご本の中身をね、読ませていただきます。この本は、そういう苦悩の日々を本になさったんですね。日記を書いていらっしゃる。平野さん自身の叫びであります。母親として子供の事、自分の事、あるいは家族の事を想うと、いろんな想いが出で来る。それを言葉に連ねて、一冊の本として記されてあります。

「由紀乃ちゃんの事を考える時、お母さんの心は、いつも静かで満ち足りた嬉しい思いでいっぱいになります。そして、あなたに恥ずかしくないように、一生懸命生きなければという強い思いが身体の底から沸いてくるのです。お人形さんのように可愛いらしい由紀乃ちゃんが、重度の心身障害児であることを告げられてから十五年、ずっしりと重い十五年間でした。眠れないままに、小さい身体を抱きしめ、泣き明かした夜。お兄ちゃんと三人で、死ぬ機会をうかがい続けたつらい日々もありました」

そういう日々を過ごされた、十五年であります。そして、お母さんはある時、大谷大学の広瀬杲先生の法話を聴く機会があったんですね、旦那様と一緒に。その時のご法話を聞いての事でありますが、こういう疑

問が広瀬先生に対して出てきたんであります。

「この子の人生は一体何なんですか？人間としての喜びや悲しみを何一つ知ることもなく、ただ空しく過ぎていく人生など生きる価値もないでありませんか」

こういう思いがお母さんの心の中からふーっと沸いて来たんですね。お父さんの大学時代の恩師、広瀬杲先生の講演会の席上で広瀬先生がこうお話されたというんですよ。

「問いを持たない人生ほど空しいものはない」

とおっしゃったのであります。このお言葉も最近、大切にさせていただいております。「空過」、仏教では空しく過ぐると言います。

「空過という事について話される先生をお母さんは睨みつけ、泣きながら訴えた若い日のお母さんでした」

そうすると広瀬先生が

「お嬢さんの人生が単に空しいだけの人生だとどうして言えるのですか？」

今度はお母さんに問うてきたんであります。ここは広瀬先生とお母さんの対話の部分ですね。優し気な微笑みを浮かべた先生の口元から穏やかな言葉が返ってきました。

「娘は何も考える事ができません。何一つ、問いを持つこともないのです」

これはお母さんの言葉です。娘は他の子供さんと同じように何も考える事もできんし、何一つ問いを持つことができんのやと言うた。正直な思いを言うた。そうすると広瀬先生はこう言うた。

「お嬢さんは、問いはちゃんと持ってますよ。大きな問いです。言葉ではなく、身体全体でお母さんに問いかけているではありませんか。無言の問いというものは言葉で表わされる問いよりも、時には深く大きなものなのですよ」

問いという事も大事なんだけど、無言の問いというものがあるんやと。娘さんは無言の問いを発してるではないかと、広瀬先生のお言葉です。

「お嬢さんの人生が、空過で終わるかどうか、それを決めるのはお母さんのこれからの生き方なのではないですか」

お母さんにすれば、自分の娘は問いも持たないし、表情もないし、しゃべる事も出来ないし、ただただ空しく過ぎていく人生なんやとそう思ったんです。周りの子と比べて、自分の娘は・・・。そこに悲しみを持ってらっしゃったんだけど、今初めて、その自分の思いがひっくり返ったんであります。娘は無言の問いというものを、この私にずっと投げかけて下さっておったんやという事に初めて気づいたんであります。しかも、娘の人生が空しく終わるかどうかは、それを決めるのは、お母さんのこれからの人生ではないでしょうか、と言われた。あなた自身のこれからの人生の生き方によって、本当に娘さんの人生が空過かどうか決まってくる。娘さんは、大きな願いを持っておって下さっていたんだと。その事を知らされたならば、これは空過どころか、私にとっては大事な、大事な方という事でしょう。意味を持ってくるんであります。もっと言えば娘さんがおらなければ、この事実に気づく事もなかったと。そういう自分の思いが破られるというんです。

我々は決めつけるんです。全て決めつけるところがあるでしょう。あの人はあんな人や、あの人はこんな人や、そして自分自身も自分自身で決めつけていきます。自分はなんと情けない者や、全部勝手にこの頭が決めつけるんです。結論下すんです。自分の人生面白くない、なんでこうなったんや、しゃあないな、面白くないなと言うとるのが私の毎日であります。愚痴しか出てこんのであります。あの人いいな、あの人うらやましいな、あのお寺さんいいな、全

部比較して自分は情けないな、自分はダメや言うて。これはなんやというと、自分の思いが勝手にそう結論を下しているだけなんや。自分の決めつけた思いが、実は間に合わなかった、自分勝手な思い込みやったと気づかせるはたらきが南無阿弥陀仏のはたらきであります。お念仏のはたらきであります。ですから、その事に気づいたお母さんは、こうおっしゃるわけであります。

「次から次への重く心に突き刺さる言葉が先生の口から静かに流れ出てきました。大きな問い、無言の問い、由紀乃の問い・・・。それに気付かされた日からお母さんは変わりました。自分自身の生き方に対して、深く問いを持つこともなく、物心ついたころより確かに自分の手で選び取ってきた人生の責任を、一切他に転嫁して恨み、愚痴と怒りの思いばかりで空しく日々を過ごしてきたのが、実はお母さんの方だったと、思い知らされたからです」

実は空しく過ぎとったのは我が身の人生そのものやったという事にお母さん目が覚めたんです。今まで娘の方が空しい人生だと思っていたのに、そうではなかったわけです。我が人生の方が空しい人生を今まで送っておったという事に目が覚めたんであります。気づかせてくれたのは、我が娘であります。娘のおかげという事が初めてそこに言えるんでしょう。それに気づくのに十五年かかるんであります、このお母さんは。すぐ気づけないんであります。まさにこれ、出遇い直されたのでしょう。十五年かかってやっと娘さんと出遇い直されたんであります。ああ、そうやったかという気づきです。さらにもうちょっと続けますね。

「気付いてみれば雪乃ちゃんの人生は、なんと満ち足りた安らぎに溢れていることでしょう。食べることも、歩くことも、何一つ自分では出来ない身体をそのままに、絶対他力の掌中に抱き込まれ、一点の疑いもなく、まかせきっている姿は、美しくまぶしいばかりでした。抱き上げればニッコリ笑うあなたは、自分をこのような身体に生み落とした母親に対する恨みも見せず、高熱と発作を繰り返す日々の中で、ただ一心に病気を背負い、今をけなげに生き続けているのでした」

思ってみればこの由紀乃ちゃんは、一切恨みをこの母親に発していないという事です。どうですか、愚痴を一切言わない。ただ一心に自分の病気を背負ってらっしゃる。そういう姿に初めて気づかされたんでしょう。

「由紀乃ちゃん、お母さんがあなたに対して残せる、たった一つの言葉があるとすれば、それは「ありがとう」の一言でしかありません。何故なら、お母さんの四十年の人生が真に豊かで幸福な人生だったと言い切れるのは、まったく由紀乃ちゃんのお陰だったからです。生まれてから今日まで、あなたはいつも全身でお母さんに語り続けてくれました。生きる事の喜びを、悲しみを、そして苦しみを、限りない愛をこめて教え続けてくれたのです。そのままでいいのよ、お母さん。無理をしてはいけないの。ほら空も山もおひさまもみんながお母さんを励ましてくれているでしょう。温かい大地がお母さんを支えていてくれているでしょう。あなたの目はいつもそういって笑うのでした。由紀乃ちゃん、お母さんの病気は、大変悪くなってきました。もうあなたに会いに行くことも、出来そうにありません。自動車の小さな振動が、腫瘍で狭くなった肺を圧迫し、呼吸を苦しめるようになったからです。遠い他県の国立病院に、たった一人で入院中のあなたの事を想う度、枕元でほほ笑むあなたの写真が涙でかすんでしまいます。でも心残りはありません。なぜなら今日まであなたがお母さんの仏様であったように、明日からはお母さんがあなたの仏様になるからです」

亡き人の願い

このようなお言葉を残して下さっておるわけでございます。私、何を申しておるかというと言うとですね、私が何とかせなあかん、ご先祖、亡くなった方に対しても何とかしてあげなならん、その思いは大事なこ

※「きこまいけ」毎月 28 日・午後２時～　みんなで「正信偈」のおけいこをしています。お気軽にどうぞ。

とでありますが、それ以上に私の方が亡き方から、あるいは生きている方でも結構です、子供さんからかもしれない、誰かわからんけど、その方から実は大きな願いをかけられておったんや。空しく人生を過ごしているのは一体誰や。あなた自身の生き様がそうではないですか？いろんな形でこの私にずっと、ずっと問いかけて下さっておった、願いをかけて下さっておった、その事に今やっと気づきましたと。これが仏法に出遇うという事であります。南無阿弥陀仏に出遇う。

仏様にはお仕事があって、この私に、お前の生き方が問題なんやぞ、お前は今空しく過ごしているんではないのか、他に原因を言うておるけれど、ひよっとしたらお前自身の生き様がそのものが空しく生きている原因を作っておるのではなかろうか、そういう事を問いかけ、願いをかけてこの私にずっと願い続けておる。その願いの端的な一言が南無阿弥陀仏であります。願いをこの私たちにわからせる為に仏様はお念仏、南無阿弥陀仏をどうぞ申す生活を、人生を送って下さいという事で、私たちに呼びかけられたんであります。ですから皆さん、念仏申すでしょう。こうやって一回考えて見てください。お墓の前で南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、大きな口でなくても小さな声でもどうぞ口に出して南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、と念仏申してみてください。これどこでもいいですよ。ご本尊の前でも、お内仏の前でも、お墓の前でもそうです。お墓の前だと南無阿弥陀仏と六字の名号がちゃんと彫ってあるでしょう。最近は色んなお墓ございますけどね。でも私たち真宗の門徒は、お墓に南無阿弥陀仏と六字の名号が石に彫ってございます。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とちょっとでも口に出してみてください。その時にちょっと思い出してほしいのは、この今自分が一声一声言うた念仏は、自分の声なんだけど、そのずっと先には、実は亡き方から私が願われておったんやったという事をちょっと頭の上に置いておいてください。亡きじいちゃんのお参りに来たと、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏・・・その時、ああそうやった、亡きじいちゃんの方が実はこの私に願いをかけて下さっておったんやったと。どういう願いがというと、どうぞ仏法を聴聞して下さい。もっと言えば、念仏申す生活を送って下さい。汝念仏申せという事です。私のこの口から一声の南無阿弥陀仏の念仏がこぼれる。その念仏は、汝念仏申せよと、仏様、亡き方からの願いであったと、呼びかけであったと。ですからこれは仏からの呼びかけととってもいいかな。仏様から、亡き方からの呼びかけ、誰に呼びかけられとったの？我が身でした。この我が身、他でもない。横の人ではない、我が身に呼びかけられておったんやった。念仏申すげえぞ、念仏申せよ、それに答えて私が今念仏申したんやという事です。ですから我々の念仏は、ちゃんと仏様、亡き方からの願いに応じた念仏なんです。応答しとるんです。対話をしとるんです。仏様の願いを聞いて、仏法を聴聞して、そしてこの私がはからずも念仏申させていただいた。もう一回亡き方との出遇い直しやった。そこに色んな事がそこに思われてくるんでないでしょうか。

冒頭申しました、先にお浄土にお帰りになった亡き人が、私たちにはおわします。その方の願いを少しでもいいから聞かせていただいて、そしてお念仏申す生活をこれからまた、日々新たに送らせていただこうではありませんか。本日はお忙しい中、お暑い中、お参りいただきまして本当にどうもありがとうございました。以上で終わらせていただきます。南無阿弥陀仏。

《編集後記》

◇本文は平成三十年八月十三日、浄光寺「追弔会」の法話録であります。洵（まこと）に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきました。

＊行事のご案内＊

「お太子さん」（聖徳太子御忌）
令和二年二十日（祝）午後一時～
法話・木村宣彰（鈴木大拙館館長）

「おてらくご」（お寺＋落語）
令和二年五月十日㊐午前十時半
落語・笑福亭瓶二
法話・浄光寺住職

「きこまいけ」（浄光寺聞法会）
毎月二十八日・午後二時